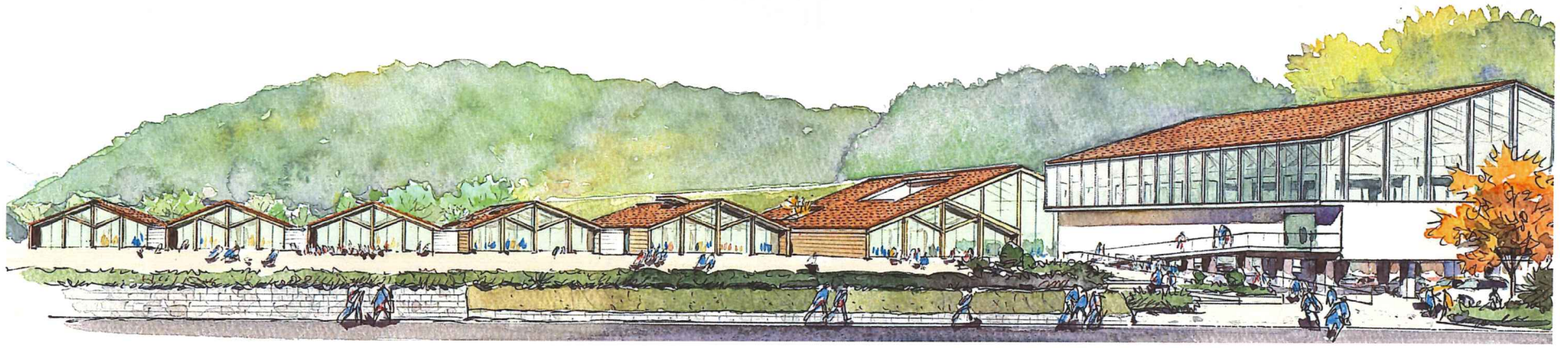
こどもから大人になる大切な時期を過ごす中学校は、様々な魅力にあふれた学び舎です。
小学校を卒業して入学した時に少し大人になったと実感できる雰囲気を持ち、自分の将来の進路を考え、
道が見えてくるような、多様な３年間の生活を生み出す、いろいろな仕掛けに満ちた空間を提案します。
独自の教科センター方式により生徒と先生の動きが活発になり、学校全体を使い切る毎日が生まれます。

１．環境と風景を編み込むように雁行する校舎

■建物にひだをつくり、環境との接触面を増やします。<(1) 配置計画 (3) 景観・環境>

校舎は周囲の環境や風景を織り込むように、教科教室ごとに雁行し伸びやかに広がります。周辺環境と接触が増える雁行によって、光や風を積極的に取り込み、多様で快適な学びの空間となります。

大らかな風景に抱かれた校舎の屋根並み



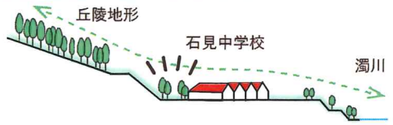
２．外にも内にもやさしい木造平屋建ての学び舎

■環境と風土を活かした建築のかたちを導きます　<(3) 景観・環境>

邑南町の気候は山間地特有のもので、冬季の寒さは厳しく、積雪が１ｍに及ぶこともあります。厳しい環境条件を制圧するのではなく、自然環境になじんだ、この地域ならではの建築を目指します。土着素材である石州瓦を積極的に用いた木造平屋校舎は、周りに日影を落とさず、於保知盆地に展開する家並みの風景に調和し、郷土への誇りや愛着を育む「ふるさと教育」を支えます。

■背後の丘から眼前の川へ、植生と風景をつなぎます

敷地南の丘陵地形から町道沿いの濁川へとつながる、盆地のおおらかな地形を捉え、新校舎の建設に併せて、植生と風景の連続性をつくります。



３．生徒や町民を迎え入れる、楽しく快適な「いわみひろば」

■町道とのレベル差を賑わいに転換します　<(1) 配置計画 (4) 地域開放・防災>

現在の正門からの斜路は道路との見通しが悪く危険です。そこで、敷地北西側に道路との約２ｍのレベル差を緩やかにつなぐ魅力的なアプローチ空間「いわみひろば」を創出します。生徒だけでなく地域住民も気軽に利用できる公園のような空間とすることで、町民と子ども達の交流が自然に生まれる、地域交流の拠点となります。ここからは学校の様子が伝わり、地域に開かれ、地域で子供を育てる「地域学校」となり、末永く地域に愛され、卒業生の誇りともなる学校が生まれます。

■体育館下に一年中快適な車寄せと駐車スペースを確保します

避難所ともなる体育館を「いわみひろば」横にピロティで２階レベルに配置します。ピロティ空間は道路のレベルとなり、車寄せと駐車スペースとなります。悪天候でも快適に校舎に入れます。災害時には雨雪を防ぐ一時避難スペースとして、体育館と共に地域に貢献します。
中の木架構が見える体育館は新しい石見中の顔であり、地域のランドマークとなります。夜にはまちの行燈として地域を照らします。

こどもや町民を迎え入れる「いわみひろば」

1階平面図兼配置図 (S=1/1000)

４．みんなでつくるためのプラットフォームとなる計画

■提案する計画の仕組みはみんなの意見を取り入れる骨組みです　<(1) 配置計画 (3) 景観・環境 (4) 地域開放・防災 (6) 設計プロセス (7) その他独自の提案>

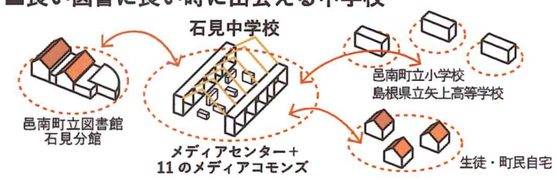
私たちが提案するのは、新しい教科センター方式のアイデアを受け止める「計画の仕組み」です。**「教科教室」**と**「特別教室」**を南北に配し、中央に**「ＨＲ」**・**「そとのＨＲ」**を内包する木造平屋の棟ユニットをズラしながら連続し、**「教科教室のメディアコモンズ」**と**「特別教室のメディアコモンズ」**がつないでいくという単純で合理的な図式をプラットフォームとして、そこにみんなのアイデアを盛込み、新しい石見中学校にふさわしい空間を共に作って行きたいと思います。

1．図書室が学校全体にひろがった「いわみメディアコモンズ」

■メディアセンターを開き、校舎全体に拡張します

図書をはじめ色々なメディアが学校全体に展開する「**いわみメディアコモンズ**」を提案します。いわば「**石見中まるごと図書館**」です。メディアコモンズには図書室の本や各教科の展示、教材が並び、教科センターと連動して、生徒の興味を拡げ主体的な学びを促します。

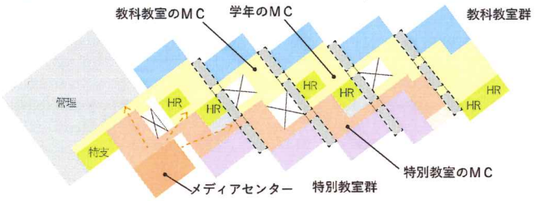
■良い図書に良い時に出会える中学校



各教科の先生と司書先生が連携し、各メディアコモンズに適時・適切な図書を配置することで、学習の深化に寄与します。「**邑南町まるごと図書館計画**」で目指されたような、地域全体で本に出合う環境づくりのため、邑南町立図書館と連携し可動家具を使った「**出張ライブラリー**」を企画するなど、常に身近に魅力的な図書がある環境づくりを支えます。

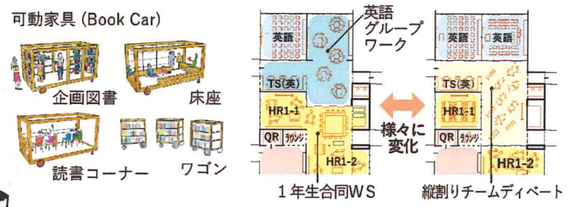
■南北それぞれに雁行するメディアコモンズ（ＭＣ）

北側の教科教室群とＨＲをつなぐ「**教科教室のメディアコモンズ（MC）**」、「**学年のメディアコモンズ（MC）**」と南側の特別教室群をつなぐ「**特別教室のメディアコモンズ（MC）**」の二つが、雁行し交わりながら、大小様々な学びの空間を創出します。



■フレキシブルに設えを変えられるメディアコモンズ

ＭＣは、様々な主体（生徒・教職員・保護者・町民）の交わりあい、学びあいを誘発する空間です。可動家具の移動や建具の開閉によって、少数の空間から大勢の空間まで規模を適宜調整できるようにし、生徒が主体的に場所を選択できる空間を創ります。ICT 教育をはじめとした今後の教育の進化にも柔軟に対応できる、フレキシブルな空間です。



2．地域と協働して創る独自の「いわみ式教科センター方式」にむけた工夫

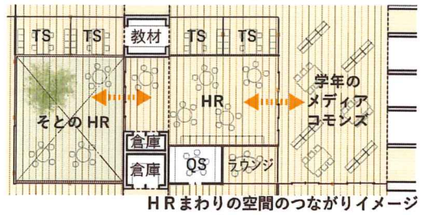
■石見中ならではの教科センターを、みんなでつくります

教科のクラスターや学年のまとまりをどう作るかを生徒・教職員・住民とのワークショップで議論検討し、計画に反映し、ここにしかない「**いわみ式教科センター方式**」を生み出します。教科センター型の可能性を最大限に広げ、総合学習やアクティブラーニングを充実させ、生徒の能動的な学びをサポートします。

2学級のＨＲが面するの学年のメディアコモンズ（1年生）

■「そとのＨＲ」と連続した学級ＨＲ

ホームベース独立型教科センター方式で不安視される「生徒の居場所の不安定さ」を、各学級に教室サイズのホームルーム（ＨＲ）を確保することで解決します。生徒たちは落ち着いた拠点と、アクティブな学びの空間を使い分けながら３年間を過ごすことができます。



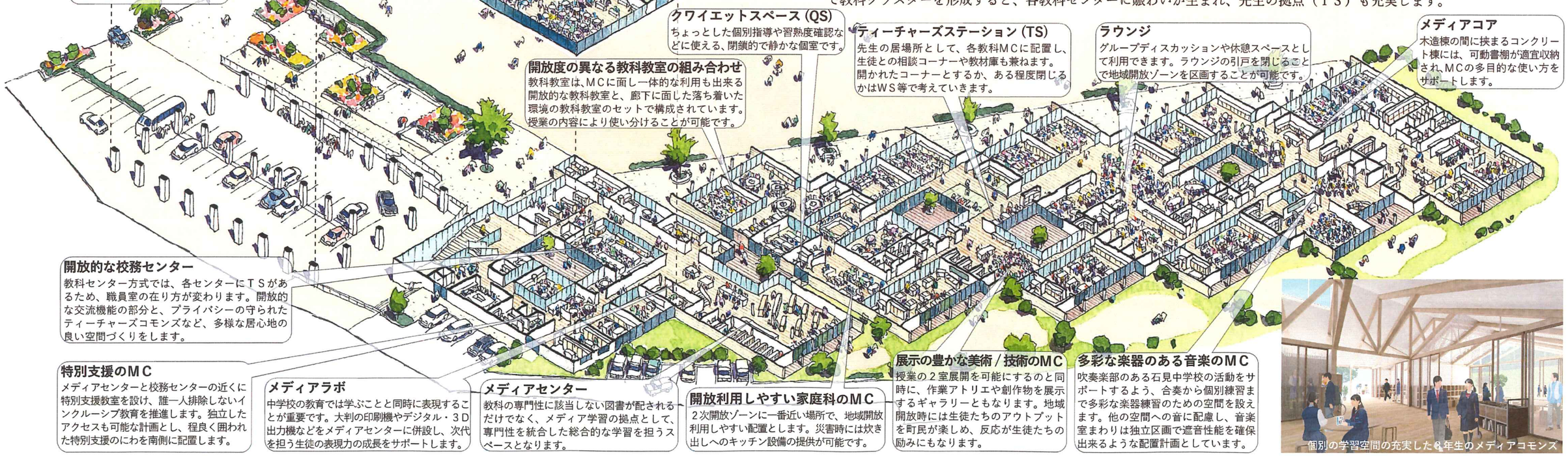
ＨＲまわりの空間のつながりイメージ

1，２年生の各ＨＲは、「そとのＨＲ(中庭)」に面します。内外フラットに繋がるデッキ仕上げとし、屋外学習にも活用されます。
各学年の学級ＨＲに面して学年のＭＣを配置し、各学年の生活に合わせた設えをします。1年生から３年生に進級するにつれ空間サイズを大きくし、進学に備えた個別の学習空間を充実させていくことが可能です。

2つの「そとのＨＲ」に面する国社のメディアコモンズ

■小規模校にあわせた教科クラスター

６クラス規模の中学校で全教科に教科センターを配置すると、活動密度が薄くなります。「英」「国・社」「理・数」の組合せで教科クラスターを形成すると、各教科センターに賑わいが生まれ、先生の拠点（ＴＳ）も充実します。



個別の学習空間の充実した３年生のメディアコモンズ

安心・安全で地域に根ざした石見中学校

<(2) 室内空間 (3) 景観・環境 (4) 地域開放・防災 (5) 建設工程 (6) 設計プロセス>

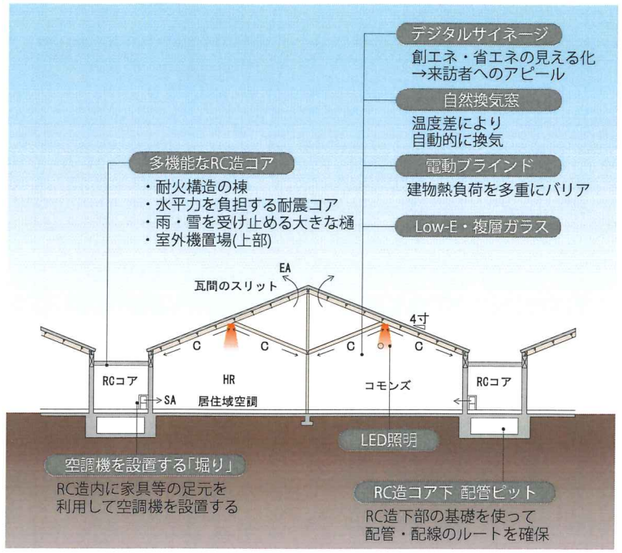
■木の魅力にあふれた木造校舎を実現するための様々な工夫

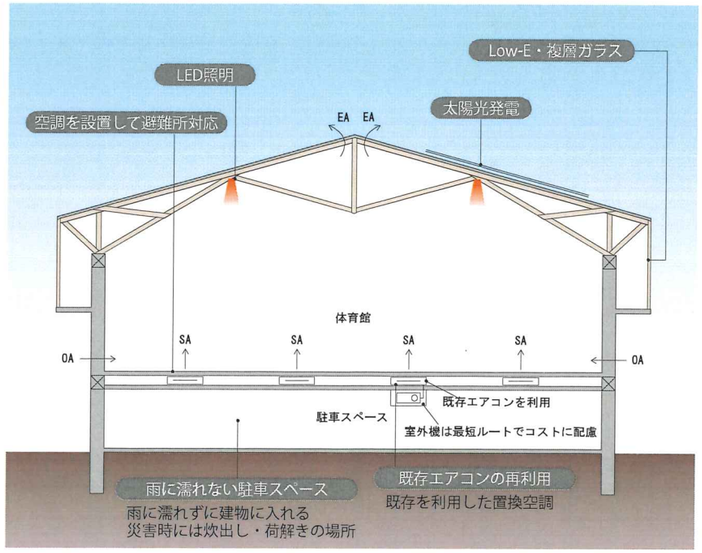
本物の木が目に見えて、手に触れることのできる、木の温かみのある校舎を実現するための工夫として、法的な対応、木を活かす構造計画、地域の気候風土を踏まえた環境・設備計画を行います。

法対応の概要

法第27条
→2,000㎡以下として
「その他 木造」を実現

令128条の2
→木造棟は1,000㎡以下
→3,000㎡毎にグループ化して周囲に3mの通路を設ける





大規模木造校舎を実現する法的な考え方

校舎棟は木造部分とRC造コアを交互に配置して、別棟解釈通達（住防発第十四号）を用い、1棟を1,000㎡以下に抑えます。加えて3,000㎡以下にグループ化して建物の周囲に3mの通路を設けます。体育館棟は2,000㎡以下として、周囲に3mの通路を設けます。これにより防耐火の規定の無い「その他木造」を可能にして、木材量を抑え、一般製材の使用により建設費を抑えます。又、木をあらわしにすることで木の特質を活かします。

木造とRC造の魅力を活かした構造計画

木造部分を帯状のRC造コアで挟み、トラスと方杖を組み合わせた屋根構造を採用します。これにより水平力は全てRC造コアが負担して、木造部分は鉛直荷重だけを支えればよいため、木造耐力壁のない開放的な空間を実現します。方杖トラス構造によって、タイバーのない高い空間を実現するとともに、柱本数を減らすことで空間のフレキシビリティを高める計画とします。RC造は大きな樋にもなり、積雪による漏水を防ぎます。

この建物に適した新しい空調システムの構築

各部屋に「掘り」を設け、そこにルームエアコン等の小型空調機を設置し簡易な置換空調システムとします。天井に吊らない事で開放性と安全性を確保します。下部からの空調は、温熱環境、換気性能に優れます。安価な設備で快適な室環境を確保します。下部にある事で、メンテナンスも容易に行なえます。

既存空調機を適切に再利用

再利用する既存の空調機は体育館用の空調として活用します。校舎の空調システムと同様に、部屋の下部ー置床下の空間に設置し床吹出しの置換空調とします。空間の下部から空調し、人の可動領域を効率的に冷し・暖めます。

西・南からの風を活かした風通しの良い建物

冬は北西の日本海からの風を妻側開口から取り入れて、夏は南からの風を桁行側から効果的に取り入れます。

■みんなでつくる設計プロセス

「いわみ式教科センター方式」を構築するためには関係者と十分な討議を重ねる必要があります。今までの検討プロセスと同様に充実したワークショップ(ＷＳ)を開催します。設計期間前半に４回程度のＷＳを開催しチームの熟練したファシリテータの進行で議論を深めます。

提案している計画案を基にＷＳのテーマを設定

１ -「教科センターをどうつくるか」
　生徒や先生等の一日の動きを考える
　・登校からHR、授業時間中、昼休み、放課後などの生徒、先生等の居るところ、うごき方、まとまり
　・移動時のカバンの処理　・昼食をとる場所(HR、ﾗﾝﾁﾙｰﾑ)
２ -「いわみメディアコモンズをどうつくるか」
　メディアセンターと各メディアコモンズの役割を考える
　・図書の移動方法、管理方法　・司書との連携方法
　・ＩＣＴ環境への対応、メディアラボの設え
３ -「地域をどのように迎え入れるか」
　地域との接点、地域開放、災害時の避難等を考える
　・平日の迎え入れ、休日の地域利用、災害時の区分
　・学校生活の確保　・外部空間の使い方
　・アプローチ、車寄せ、駐車スペース
４ -「各所へのアプローチをどうつくるか」
　上下足の考え方、履き替え箇所を考える
　・昇降口の在り方　・テラス、庭からのアプローチ
　・体育館へのアプローチ　・上下足やカバンの収納

教科センター方式の中学校の見学会開催

我々チームが設計を行なった教科センター方式中学校を訪れて、施設を見学・体験、教科センター方式の状況や使い勝手などを教職員等からヒアリングできる会を開催します。教科センター方式を実感してもらいます。

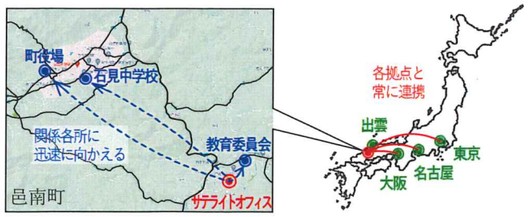
■邑南町に根ざして新しい建築を生む体制

サテライトオフィスの開設

良い学校をつくるには設計者も地域に根ざし、関係者と一体<one team>となって計画を進めるのが重要と考えています。我々チームは邑南町内にオフィスを開設し、コアメンバーが常勤して、邑南町の環境・風土や石見中学校の歴史・雰囲気をより強く感じ、関係者とも良好な関係を築き、プロジェクトを進行します。

圧倒的なスピード × 正確さ

限られた設計期間で良い成果をつくるには、迅速かつ根拠のある検討が必要です。我々はサテライトオフィスを含めた各拠点でＴＶ会議システムを構築します。専門性を持ったスタッフや協力事務所ともいつでも打合せが出来、スピード感のある検討を行います。また、県条例等の協議を行う場合、島根県を熟知したメンバーにより時間のロスが無く、的確に行います。



様々な組織の集合体

新しい試みや仕組みを構築する時、既成概念により物事が上手く進まない場合があります。我々チームは様々な思想・考えを持った組織の集合体であり、多角的に物事を検討し、様々な意見が融合して最適な解を見出します。

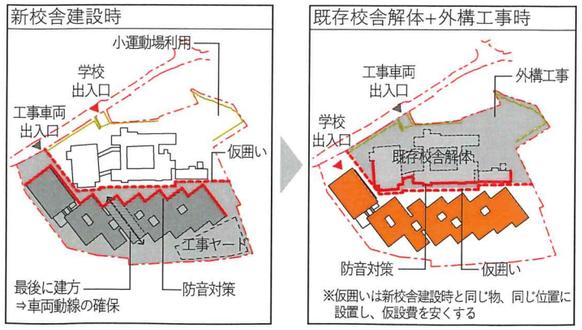
■安全に使いながらの工事

安全な工事計画

既存校舎を使いながらの工事となることから、工事と学校活動とのエリアを明快に分けます。また工事車両と学校動線が交わらないよう、生徒や先生等のアプローチは新校舎建設時においては既存の門から、既存校舎解体+外構工事時には、体育館の下からアプローチします。

学校活動への配慮

学校活動への影響を少なくするため、現駐車場を小運動場にすることを検討します。



学校環境の確保・コロナ対策

工事中、既存校舎で自然換気が出来る様に、工事エリアからの騒音やほこり等を防ぐ計画をします。外部足場の外側に防音パネルや防音シートを上部へ突き出して設置する計画とします。また、建物中央部分を最後に施工する手順とすることで、工事車両動線を確保し、既存校舎から遠い敷地南側を工事ヤードとします。

■地域と繋がり、地域を取り込んだ中学校

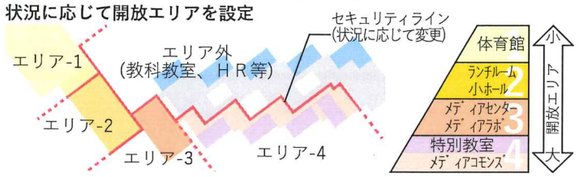
一緒に育てる中学校

邑南町・島根県を代表する草木を積極的に植えます。特に「いわみひろば」には四季折々に花を咲かせる植物を植え、四季の移ろいを感じられる環境を作ります。
植物や生き物の生態を学べる場となり、地域住民にとっても憩いの場となります。また、出来上がった後も、植替え等のメンテナンスを、生徒と地域とが一体となり行える仕組みを提案します。

安心・安全に開放できる校舎

開放の状況に応じてセキュリティラインが変更できる計画とします。生活エリアである「教科教室のメディアコモンズ」「学年のメディアコモンズ」のプライバシーは開放時にも守られます。体育館だけでも開放が出来るので、災害避難時でも、学習空間が確保できます。

状況に応じて開放エリアを設定



地域の財産を守る学校

敷地を通っている農業用水路は容易にメンテナンスが行えるように過剰な塞ぎはせず、簡易な蓋程度とします。部分的に、生徒に見せる箇所をあえて設け、水の大切さ、農業の重要さを学習できる場とします。